

第4章 考察編

茅野遺跡出土の土製耳飾りについて

1. 系列相互の影響～彫り込み系列と車輪系列を例として～

土製耳飾りの諸要素の観察により、系列同士は同時期にしつつ相互に影響しあい変化していると想定する。茅野遺跡出土の土製耳飾りの彫込系列と車輪系列について相互に与えている影響と変遷を図4-1のように示した。横は系列グループ間の影響の近さを表す。縦は系列内での変遷を示すものであり、時間の経過を示していない。ただし枠内の横線の区画は、出土土器形式から遺構の時期を推定し、時期が判定できる遺構から出土した耳飾りの、後期と晩期の境界を表す。特にないものは、後期後半から晩期前半を主体とする時期のものとしてとらえる。

実線の囲みは彫込系列、破線は車輪系列を区分する。各囲みの上部に示したモチーフは、ブリッジ付け根あるいは4単位に配置される、デザインの主要をなすポイントモチーフであり、ポイントモチーフに着眼することで各系列内での細分を試みた。ポイントモチーフは彫込系列にも車輪系列にも共通して現れる。左端の彫込系列1類は、茅野遺跡以外にもよく見ることができる群である（「広域デザイン」）。車輪系列では1類-2が他遺跡でも共通してみられることが多い「広域デザイン」の群である。また掘込系列の別の群に渦巻+三叉文をポイントモチーフとする群があり、右端に示した。その他の小さな囲みで示しているものは系列の中でも独自性のあるものとして、茅野遺跡に特徴的な群であり、「ローカルデザイン」の「茅野デザイン」と仮称する。

本書にて設定した系列を用いて土製耳飾りの広域的な在り方をとらえる際には、系統図のような単一的にとらえるのではなく、時間・空間軸を意識しながらも複数の類型群のまとまりが互いに影響するようなイメージであてはめて捉えることが重要だと思われる。

2. 分類結果にみえてきた系列ごとの時期

各系列の項目（58～71頁）での考察を踏まえて、時期と系列の関係性について触れたい。繰り返すがここでの土製耳飾りの時期とは、1項にも記したとおり、土製耳飾りが出土した遺構のうち、縄文土器の伴出により土器型式による時期比定ができたものについて、遺構の時期決定を行い、これを同遺構から出土した耳飾りの時期推定に利用したものである。

- ・一単位の1類は後期中葉から末ごろであるが2類～4類は後期後半から晩期前半に生じる。花卉系列に近い類とし、内面刻目帯と肩部文様帯を持つ精製品である一単位系列5類は、後期後半から成立し始め、晩期前半がピークと位置づけられる。
- ・花卉系列の小型品（1～3類型）はおもに晩期前半（安行3a～3b）中心に作られている
- ・一単位系列5類と花卉系列1～3類は連続的する関係にあると考えられる。
- ・花卉系列の4類（千網類型）は晩期の前半から半ばにかけて、茅野遺跡では安行3b式段階に登場すると考えられる。
- ・円文系列の1～2類は後期後半から晩期にかけて、周縁に刻目が施文される円文系列3類は晩期前半に比定される。
- ・彫込系列1類と2類に見られ、遺跡間に普遍的にみられるデザインのもの（108、202、276、177）は後期後半から晩期前半の時期のものにあたり、時間的に細かく捉えられない。



図 4-1 茅野遺跡土製耳飾り系列模式図（彫込系列・車輪系列）

- ・彫込系列のうち、広域にわたり分布していない本遺跡に特有のものとみられる「茅野デザイン」(079、093、150、178、184、212、435)は、後期の末から制作され始め、晩期にはそのバリエーションに自由度が増しているように見て取れる。
 - ・瘤系列は後期末から晩期前半にかけて使用される。
 - ・小型有文系列は後期後半から晩期前半にかけてみられるが、周縁に刻目を施すものが古く、2類から3類にみられる、中央部分を盛り上げる、刻目を放射状に施文するなど、中央部分を意識したデザインの群は晩期に現れる。
 - ・粗製系列は1類～3類とも数点を除き後期の所産のものが多いようだが、粗製ながら他遺跡との関連がうかがわれる群もあるので、系列内での細分の再検討と遺跡間の比較を重ねていく必要性を感じる。
- 耳飾りの系列はダイレクトに空間軸・時間軸を表すとは言えない。あくまでも多種多様に存在する土製耳飾りの捉え方の方法のようなものであり、今後、型式設定するには慎重に検証する必要があるだろう。出土状況、共伴遺物の精度を一定に整えたうえでの資料の扱いが肝要である。

3. 地域間で見える土製耳飾りの系列

茅野遺跡出土の土製耳飾りを基準に設定した系列を、他遺跡の出土資料にあてはめた場合、茅野遺跡と同じ系列に属するものとして分類できるものと、そうではなく共通性はあるそうだが茅野遺跡のものとは変異の幅がみられるものを分けて、遺跡ごとにグラフに示した(図4-2、図4-3)。

取り扱った遺跡は群馬県内では榛東村下新井遺跡、みなかみ町矢瀬遺跡、渋川市瀧沢遺跡、藤岡市谷地遺跡・中栗須滝川Ⅱ遺跡、桐生市千網谷戸遺跡である。また、群馬県外の遺跡は栃木県小山市乙女不動原北浦遺跡、埼玉県桶川市高井東遺跡、長野県松本市エリ穴遺跡、長野市宮崎遺跡、新潟県上越市籠峯遺跡である。

茅野遺跡出土の土製耳飾りを基準として分類した系列を、グラフに灰色で表した。各系列に類する耳飾りの点数を白で表した。また、同一の系列と想定されるが、小破片であるなどにより、全体の文様が判別できないものも各系列の白の群に含める。また、遺物の確認と集計は発掘調査報告書等によるが、報告書によっては出土した土製耳飾りのすべてを図示していないため、全体の数における系列の比は検討対象にならない。ここでは遺跡ごとに各系列に比定したものに、茅野遺跡と近いものがどのくらいの比率で認められるか(灰色と白の比)を参考にされたい。また、各グラフのデータ数は、瀧沢遺跡の40点からエリ穴遺跡の1,712点と大差があることも留意していただきたい。

「その他」の区分は、茅野遺跡には見られない、別の系統を示していることを推定させるものとした。「不明」は小片のため類型の判別ができないものを数えた。

茅野遺跡で設定した系列を示す灰色部分と、変異の幅を示す資料である白の部分では、茅野遺跡から遠隔地遺跡であるほど白の部分の占める割合が多いと予測された。

グラフ全体を見ると、最も茅野遺跡との違いが少ない(グラフの白部分が少ない)遺跡は谷地遺跡と千網谷戸である。下新井遺跡の耳飾りとの差異は茅野遺跡よりも前の後期後半～末を主体とするため、時期的な変異によるものと考えられる。千網谷戸遺跡は出土品のすべてを確認していないので花卉系列に偏っている。谷地遺跡は一単位系列以外はほぼ同列に扱うことができる変異幅の少なさを示す。一単位系列に類する6点のうち破片であるため文様の全体を把握することができない理由で類するグループに区分したものが3点である。グラフによる土製耳飾りの系列比較は、茅野遺跡と谷地遺跡との関係性の深さを示していると読み取れる。

一単位系列を見ると県内の遺跡であっても類するグループが占める割合が一定以上あることを読み取

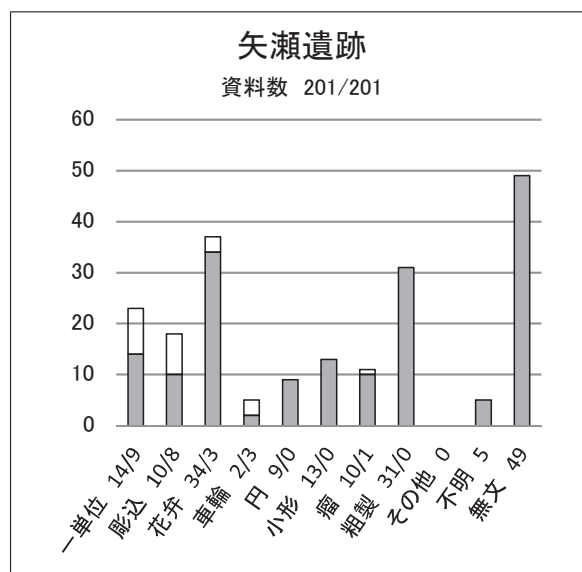
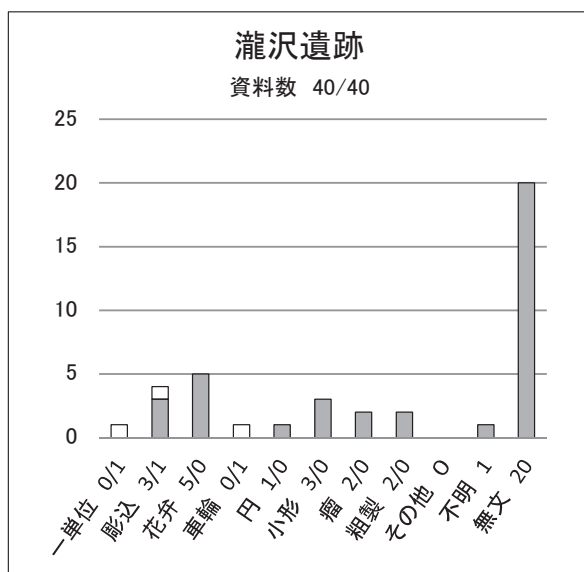
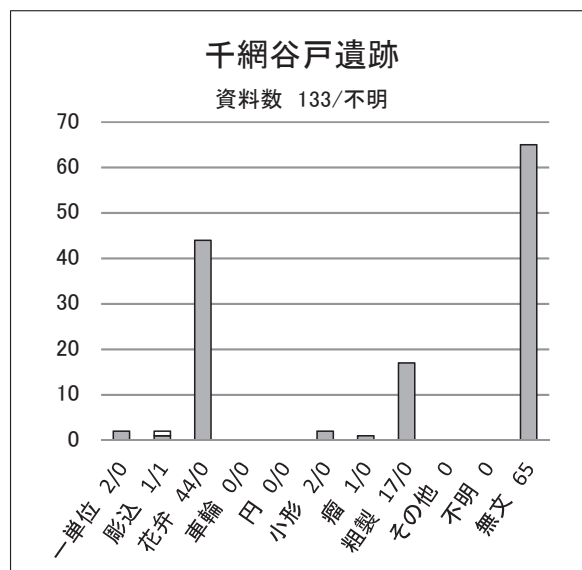
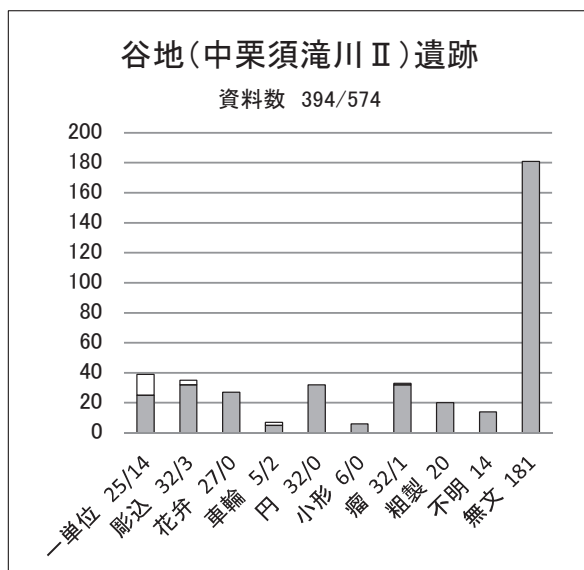
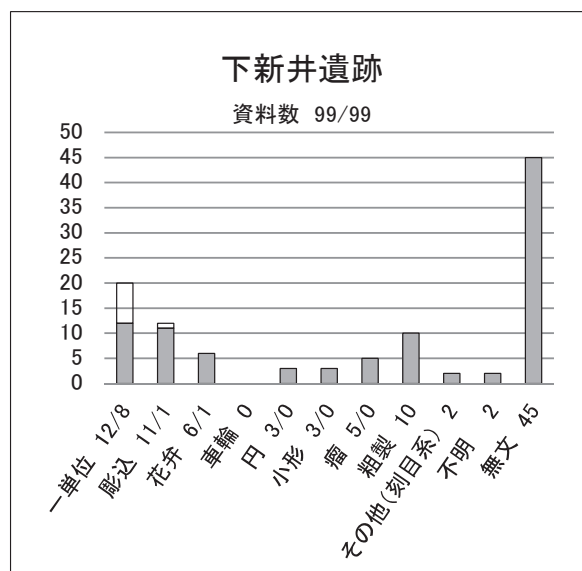
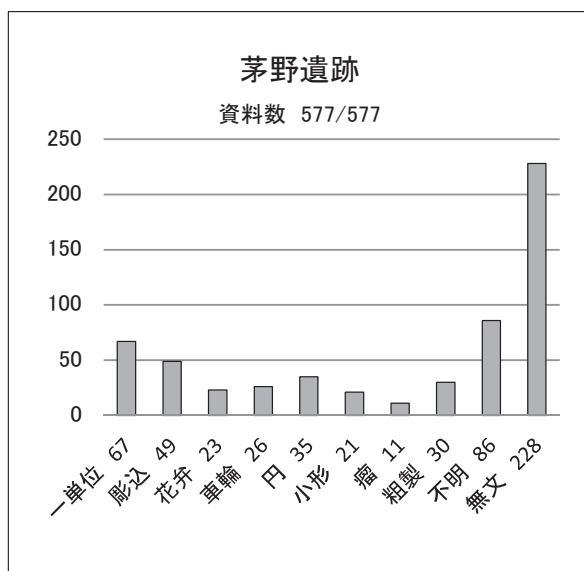
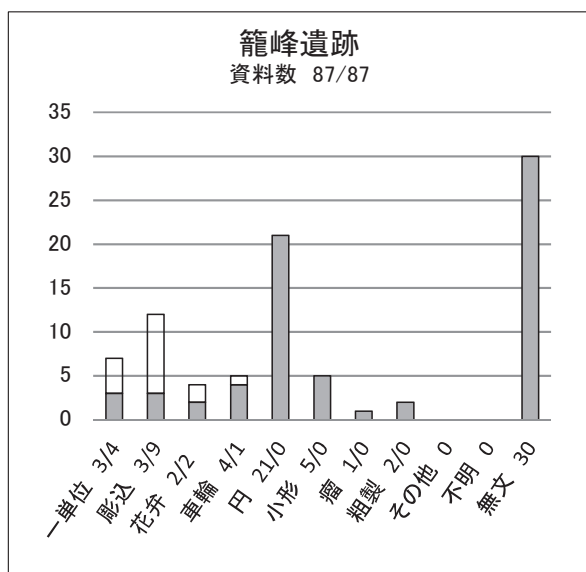
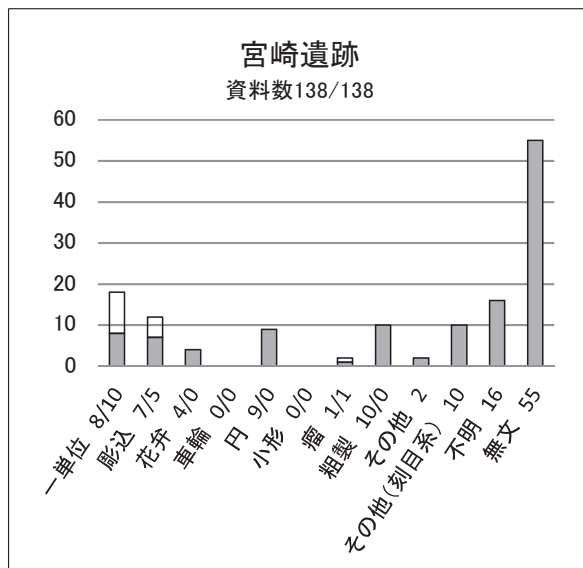
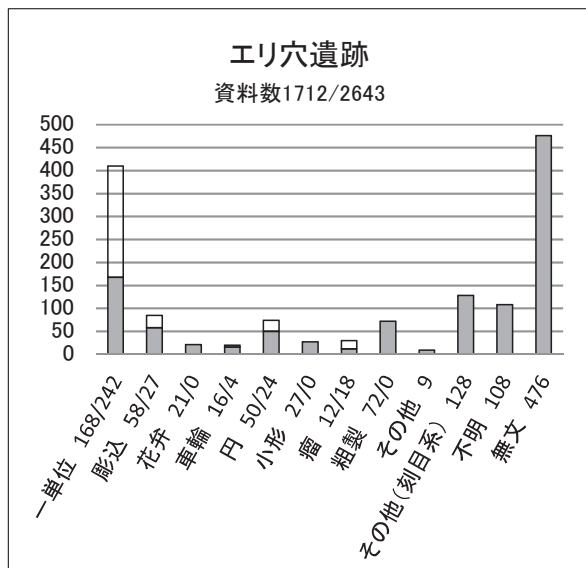
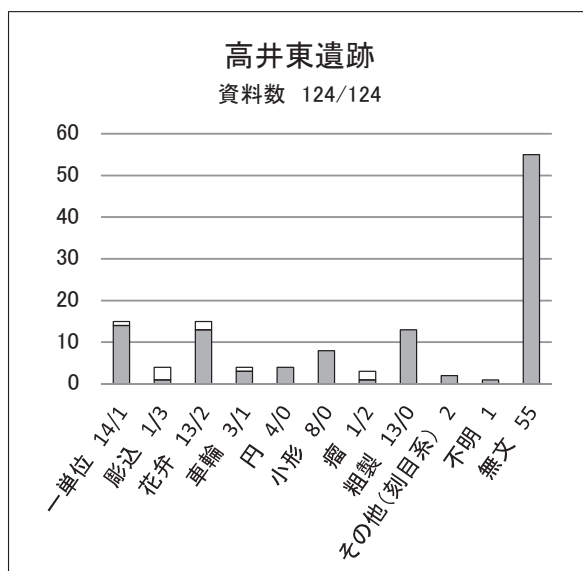
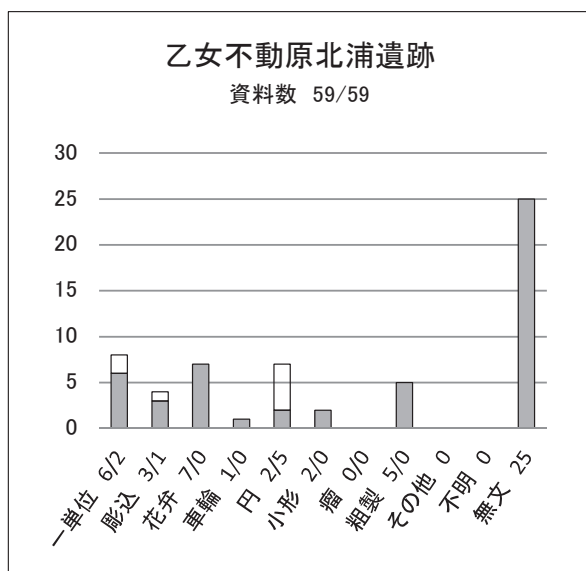


図4-2 遺跡別土製耳飾り系列グラフ(1)



棒グラフの見方

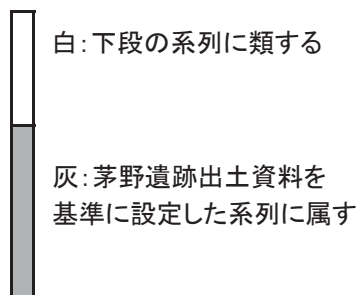


図 4-3 遺跡別土製耳飾り系列グラフ (2)

ることができる。変異の幅（茅野遺跡を基準としての表現である）が大きいのは出土点数も多いエリ穴である。一単位系列に該当する耳飾りは類するものも合わせて410点を数える。類似資料のほうが多いという点は、長野方面での一単位系列のバリエーションの豊富さを示唆している。宮崎遺跡においても同様の傾向を示す。

一単位系列のなかでも花卉系列に近い、緻密な掘り込み文様を持つもの（一単位系列5類）の特徴として肩部文様帯がある。周縁部に外側に向け斜めにつけた細幅の文様帯に、玉抱三叉文など連続する三叉文と緻密な刻目を巡らせる、あるいは正面の文様の主要なポイントにあたる部分にあわせて玉抱三叉

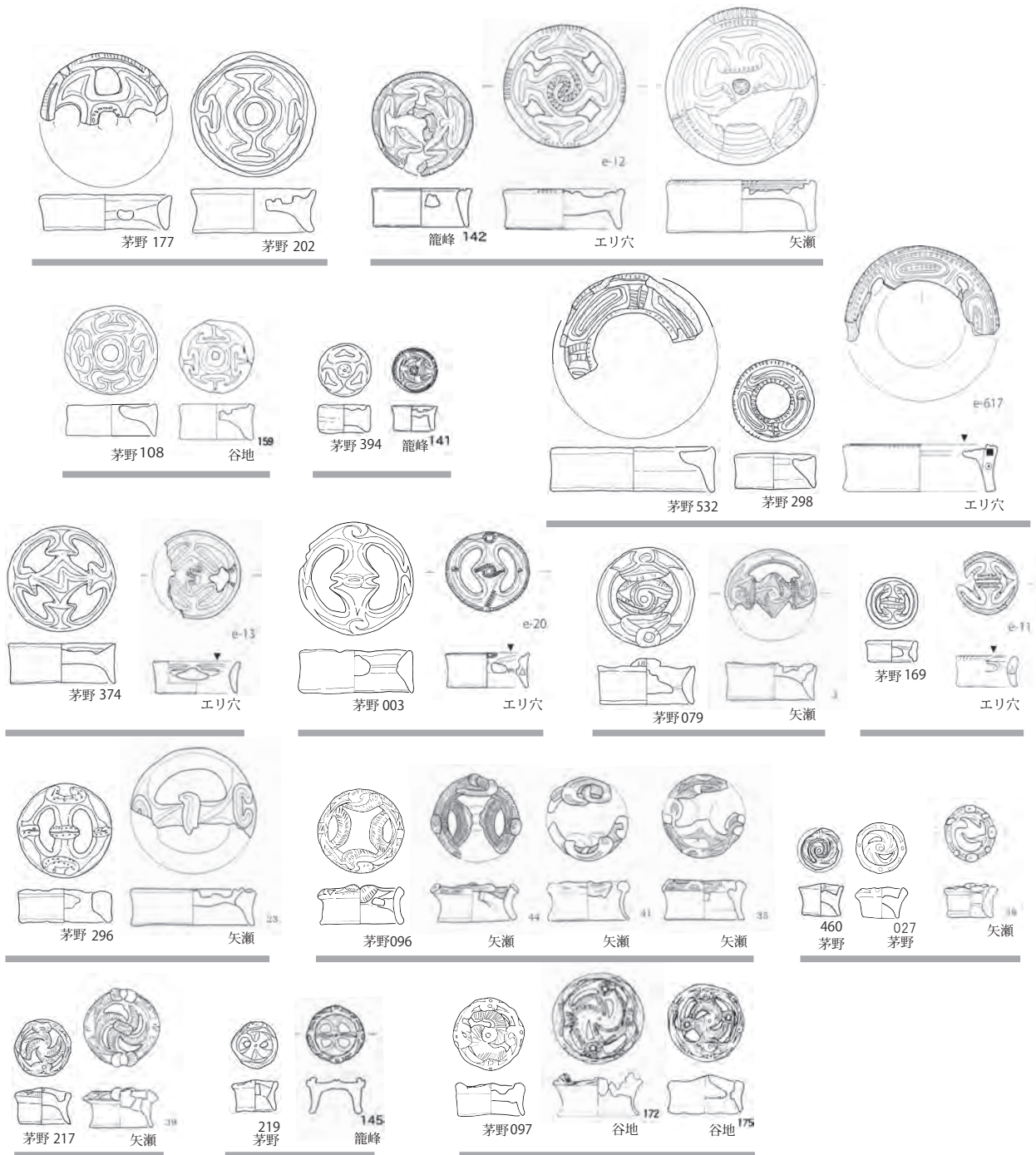


図4-4 土製耳飾りの類似するデザイン

文や三叉文を配置する。肩部文様帯を有することと緻密で華麗な優品であることは一致する。ところが他遺跡をみると、肩部文様帯を持つものは群馬県内には分布するが、高井東、乙女不動原北浦で各1点と少ない。籠峰、宮崎でも、一単位系列が168点も出土しているエリ穴でも見られない。肩部文様帯は花卉系列に多用される加飾法であるが、一単位系列に影響を与えるのは群馬県域を中心とした地域色であると推定し、今後確認を行っていく必要がある。

もう1点、一単位系列などの周縁の主要文様の外側にのみ部分的に刻目を施すものがみられる（133、461、184）。この一単位文様に付随する刻目加飾はエリ穴遺跡の一単位系列精製品に多用されている。宮崎遺跡にも2点見られる。他の遺跡で同様の加飾を有する耳飾りは矢瀬、高井東である。エリ穴など長野県域において豊富な、一単位系列のバリエーションとして生まれ、群馬県域に影響を与えた装飾の要素である可能性を推定し、採用される時期が限定的な装飾である可能性も含め、今後の検討課題としたい。

掘り込み系列を類似資料区分に注目すると籠峰遺跡に変異幅が広がっている。個別にみると長野県域に近い籠峰遺跡では一単位系列と彫込系列とが融合している特徴を持つものが多くみられ、要素が混在していない純粋な一単位系列、彫込系列をみる機会は少ない。土製耳飾り分布域の周縁にあたる新潟県域では、掘り込み系列と一単位系列を区分して製作する規範が弱まっているかのようなのである。茅野遺跡以北の瀧沢や矢瀬で掘り込み系列の変異が多いことは関連があるか、今後検討する必要があるだろう。

車輪系列は茅野遺跡以外では非常に少ない。群馬県内の遺跡からは谷地で5点、瀧沢で1点、矢瀬で

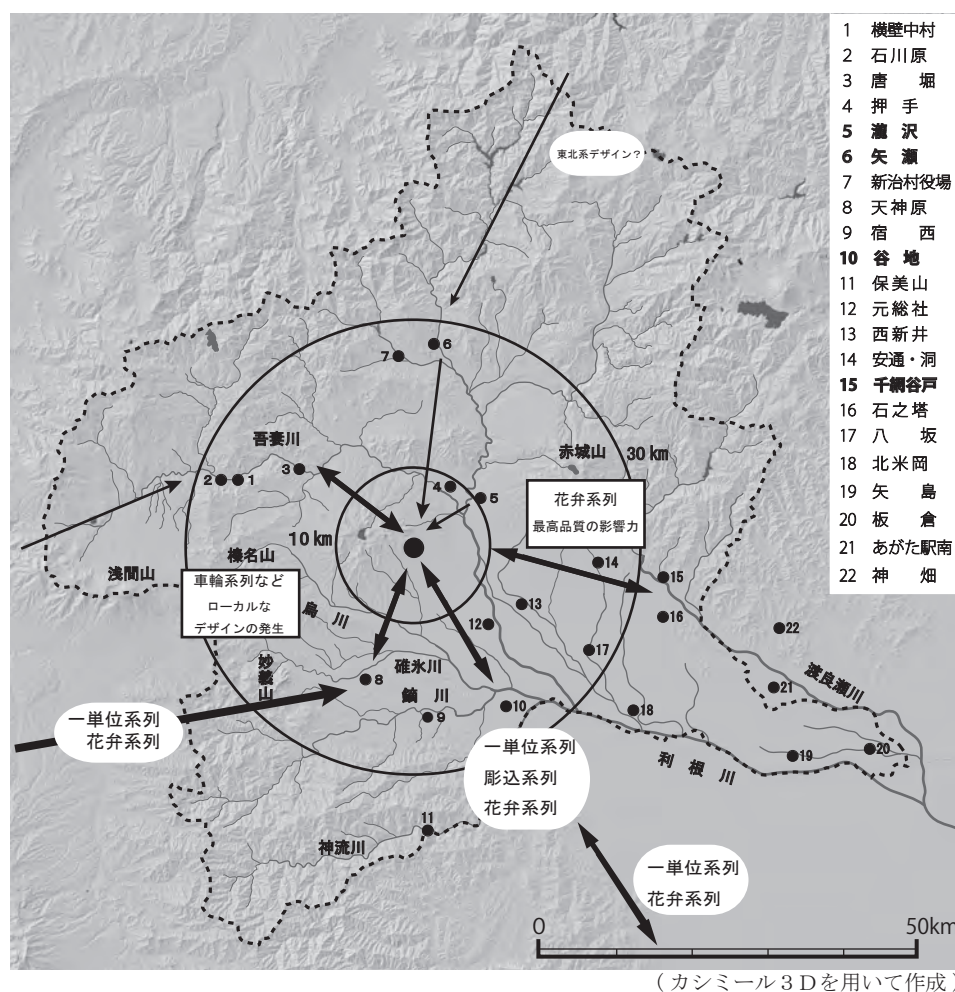


図4-5 土製耳飾りの系列から見た茅野遺跡と主要遺跡の関わり

5点である。エリ穴で20点、乙女不動原北浦で1点、高井東で4点出土している。茅野遺跡以外の遺跡で報告されている車輪系列は、ほとんどが1類であり、2類・3類は茅野遺跡地域のオリジナル性が高い類である可能性がある。籠峰遺跡出土資料に注目すると、車輪系列1類に茅野遺跡との共通性が強くあらわれている（報告書図版141、資料No.141、142）。ほかに、他遺跡出土の各類型のうち、茅野遺跡出土品と近い形状の資料を図化した（図版4-4）。矢瀬遺跡2号住居跡から出土したNo.3は茅野遺跡の彫込み系列に類似するブリッジ形状のもの。同じく矢瀬遺跡16号住居跡のNo.35は花卉系列で、茅野遺跡のNo.096とよく似る。また矢瀬遺跡遺構外出土土製品No.14は車輪系列で、茅野遺跡177に似る。No.23は堀込系列で茅野遺跡No.296に似ている。籠峰遺跡では図版141の141は車輪系列で茅野の394に似ている。142、143、144が車輪系列で、茅野遺跡の177に類似する。145は花卉系列で茅野遺跡430に類するが下新井遺跡にも酷似する花卉系列がみられる。エリ穴遺跡のe-11は彫込系列で、茅野遺跡のNo.169に近い。e-12は茅野遺跡の車輪系列であるNo.202と、e-13は茅野遺跡No.374、178と、e-20は車輪系列であるが茅野遺跡の土製耳飾りNo.003とNo.178に類似性が認められる。e-617は茅野遺跡のNo.298や532に似る車輪系列である。エリ穴遺跡の1単位系列には正面の外周に刻目を巡らせるものが多い。また堀込系列のブリッジ付け根の三叉文が大きく、一単位系列のそれと似ているものがみられる（e-1460～e-1467）。茅野遺跡の土製耳飾りは、長野県域方面から一単位系列において強い影響を受けている印象を受ける。

遠方の遺跡でも車輪系列では茅野遺跡と共通性が顕著であることがわかる。これまで、花卉系列の傾向として、広域にわたり分布していることとデザインの規格性が強いということを認識してきたが、一見派手さのない車輪系列の耳飾りにも、強い規格性があり、それゆえに遠隔の遺跡間でも共通する形態を持つものが出土する。こういった領域を越えて通用するデザインを「広域デザイン」とすると、茅野遺跡の車輪系列に分類した26点のうち4点がそれにあたる。残り22点は同じ系譜を示しつつも他遺跡出土資料と比較するとどうしても共通性がよくなるもの、似ているけれど異なる要素も多いと言わざるを得ないものを含む群である。それを「広域デザイン」に対し「ローカルデザイン」と捉える。グラフによる他遺跡との比較で、茅野遺跡の車輪系列には他の遺跡よりも「ローカルデザイン」が豊かに展開していると読み取ることができた。土製耳飾りの分布傾向では、車輪系列はそのなかに「広域デザイン」と「ローカルデザイン」を含んでおり、花卉系列はそのほとんどが「広域デザイン」であると捉えることができる。一単位系列にみる部分的な刻目を加飾する一群は「ローカルデザイン」による装飾といえるだろう。また、同様にその他の系列にもそのなかに含む「広域」と「ローカル」を見出していく作業を行うことで、土製耳飾りの多種多様なデザインの広がり傾向と遺跡間の影響関係を捉えることができるだろう。

参考・引用文献

- 月夜野町教育委員会 2005 『上組北部遺跡群Ⅱ 矢瀬遺跡』
- 群馬県藤岡市教育委員会 1988 『C7 神明北遺跡 C8 谷地遺跡 本文編』
- 群馬県藤岡市教育委員会 2002 『中栗須滝川Ⅱ遺跡』
- 松本市教育委員会 2018 『松本市文化財調査報告 No.228 長野県松本市 エリ穴遺跡 遺物編1・第3分冊』
- 新潟県中郷村教育委員会 2000 『籠峰遺跡 発掘調査報告書Ⅱ 遺物編』
- 群馬県渋川市教育委員会 2008 『史跡瀧沢石器時代遺跡Ⅰ』
- 群馬県渋川市教育委員会 2008 『史跡瀧沢石器時代遺跡Ⅱ』
- 長野市教育委員会 川田土地改良区 1988 『長野市の埋蔵文化財第28集 宮崎遺跡』
- 小山市教育委員会 1982 『小山市文化財調査報告書第11集 乙女不動原北浦遺跡 発掘調査報告書』
- 埼玉県遺跡調査会 1974 『埼玉県遺跡調査会報告 第25集 高井東遺跡調査報告書』